



| | |
|--------------|---|
| Title | 海外体験型教育とは |
| Author(s) | 敦賀, 和外; 本庄, かおり; 安藤, 由香里 他 |
| Citation | GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 108-111 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/55601 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

4-2 海外体験型教育とは

敦賀和外 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

本庄かおり 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授

安藤由香里 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教

片山 歩 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任事務職員

「海外体験学習」とは何を指すのでしょうか。2008年に発表された中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」¹では、教育改革の方策として、「体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れる」(傍点筆者)ことが求められ、具体的には「社会奉仕体験活動、サービスマーケティング、フィールドワーク、インターンシップ、海外体験学習や短期留学等の体験活動を効果的に実施する。学外の体験活動についても教育の質を確保するよう、大学の責任の下で実施する」(傍点筆者)ことが提言されています。また、2004年に発足した「大学における海外体験学習研究会(JOELN: Japan Overseas Experiential Learning Network)」は、海外での体験学習を実施する大学が相互に交流し、海外体験学習の教育目的・目標、内容・方法、効果・評価、危機管理などの課題に取り組んでいます。JOELNは「海外体験学習」の原則を以下のように定めています²。

- 1) 大学(学部)レベルで、海外プログラムを実施する。
- 2) 教育課程に組み込まれており、単位のために事前に履修登録が行われる。
- 3) 大学がマネジメントを行っている(エージェントや団体に一括委託しない)。
- 4) 大学(学部)として組織的に行っている(教員の個人的な取り組みでない)。

1 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf (2015年11月16日最終閲覧)

2 JOELNホームページ <http://joeln.jp/concept/> (2015年11月16日最終閲覧)

5) いわゆる外国語学習のためではなく、フィールドでの体験を主とする。上記中教審の報告及びJOELNが示した原則を照らし合わせ、GLOCOL/FIELDOとしては、「海外体験学習(教育)」を次のように考えました。

「日本国内の大学における多様な教育方法の一つとして、外国大学への留学及び外国語習得以外の目的で大学の責任の下に提供される海外体験での学習(学習の機会を与える教育)」

「海外体験型教育企画オフィス (FIELDO: Fieldwork, Internship and Experiential Learning Design Office)」は2010年に設置されましたが、FIELDOが実施する海外体験型教育の企画・実施にあたっては以下の点を目的として定めました。

- 1) グローバル人材、国際協力と開発の分野で活躍できる人材、および、共生社会の実現のために資する人材の育成
- 2) 調整力、コミュニケーション力、柔軟性といった、卒業後にプロフェッショナルとして自主的に活動したり他者や他機関と協働するために必要な資質の涵養
- 3) フィールド実習を通じた学習と実践経験を通じ、多角的視点を持って社会を批判的に思考し行動する学生の育成

1. 「海外体験」の3レベル

「海外体験」と一口に言っても、その経験の質は様々です。これまでのGLOCOLの経験から、海外における「体験」には、3つのレベルがあると考えています。

第一のレベルは、「海外(を)体験」することです。大学に入学するまで海外旅行も経験したことのない学生もいます。大学が提供する海外体験型教育プログラムでは、初めて海外渡航する学生にとって、教員が引率し大学が安全管理に関与していることが安心材料となっています。また、海外(を)体験した学生たちの「自分の英語が通じない」、「自分の知識があまりにも足りなかった」といった「失敗体験」からの学びは重要で、その失敗があったからこそ奮起し、再び海外での活動に参加するケースが見られました。

第二のレベルは、「海外(でも)体験」することです。このレベルは、日本において研究に従事していた学生が、海外の研究所などで研究体験をすることにより、日本の優れている点もしくは欠如している点について気づきを得ることができます。

そして第三のレベルは、「海外(だからこそ)体験」することです。この体験レベルは、「海外(を)体験」するだけでなく、基本的(もしくは高度)なスキルを持つ学生が、海外でしか出来ない活動を行うことです。

この3レベルは、必ずしも直線的、段階的なものではありません。大学が海外体験型教育プログラムを企画する際、どのような学生を対象にするかをよく検討することがまずは重要となります。

2. プログラムの形態と内容

GLOCOLが実施してきた海外体験型教育プログラムは、大別して「フィールドスタディ」(以下、FS)と「インターンシップ」(以下、IS)の2種類があります。FSは、約1週間から10日間、グループ単位で行う体験プログラムで、原則的には教員が企画、事前学習から引率まで行います。ISは、学生が個人で渡航する体験プログラムで、期間は短くて約1週間、最長では7ヵ月ほどの滞在となったケースもありました。ISの派遣先は、教員の助言を得つつ、学生が主体的に探すことが原則となります。(受け入れ先を特定した募集も過去に例外的にあったが、斡旋は行いませんでした。)

個々のプログラム内容については時間の都合上割愛しますが、全体を俯瞰してみると体験型教育プログラムには以下の要素が含まれていることがわかります。

- 1) 観察(見る・聞く) — 実習先の自然環境、生活習慣を観察すること、会議を傍聴すること等はこの部類に入ります。
- 2) 交流(話す) — 地元住民との対話、現地の大学生との交流セッション、専門家との議論等が含まれる。一定のコミュニケーション能力、専門知識が必要となります。
- 3) 調査(調べる) — 特定の分野に関する聞き取り、測定、分析、評価などが含まれる。より高度な専門知識及びコミュニケーション能力が求められます。
- 4) 就労(働く) — 将来プロフェッショナルとして活動するための修練であり、特定の目的に沿って主体的に活動することが求められます。

各要素の濃淡は、プログラムの目的、対象とする学生、実習国の事情によって異なりますが、「海外(を)体験する」ことが中心のプログラムは、観察、交流の要素が強く、「海外(でも)(だからこそ)体験する」プログラムは、調査、就労の要素の比重が大きくなると言えます。

3. GLOCOLの実績

GLOCOLでは、FIELDOの設立から2015年までの5年間に、19カ国47件のFSで308名、28カ国にISで65名、計373名を派遣しました(2015年10月現在)。

参加学生の所属内訳は、(大阪大学大学院16研究科中)14研究科及び全11学部で、学部の一年生から博士後期課程の学生まで全ての学年からの参加があり、ほぼ全学的にプログラムを提供できました。所属先のトップ3は大学院が工学、人間科学、医学(保健学含む)で、学部は外国語、法学、人間科学でした。参加学生の男女比率も、男子が52%、女子が48%となり、均衡の取れたものとなりました。留学生の参加も12%にのぼり、阪大生総数に対する留学生比率(7.9%)を上回りました。

事業開始から5年であり、参加した学生たちも就職して間もないか、もしくは未だ大学に在籍しているので、真の成果が問われるのはこれからとなります。しかし、FIELDO設立初年度(2010年度)の試行プログラムに参加した学生が、国連事務局若手職員を採用するための試験で難関と言われる国連事務局ヤング・プロフェッショナル・プログラム(YPP)に2015年に合格しました。その他でも、FSを経験した後に青年海外協力隊に参加した学生、GLOCOLのプログラムを機に長期留学を決めた学生、国際協力機構(JICA)やグローバル展開している企業に就職した学生も出てきました。国際舞台に向けて一歩を踏み始めた学生たちが現れてきたことは、企画担当者として嬉しい限りです。